

常設展示のご案内

野洲川流域の歴史を物語る遺跡出土品の収蔵庫
古の宝物庫をのぞいてみませんか？



40th anniversary of opening on November 3, 2020



守山市立埋蔵文化財センター

野洲川改修工事の際に発見、調査された^{はっとりいせき}服部遺跡の故地に開館し、野洲川流域の歴史を物語る遺跡出土品の収蔵と展示公開を行なっています。守山市では、昭和の発掘史に^{きらめ}煌きを放った服部遺跡以外にも、弥生時代の遺跡である^{しものごう}下之郷遺跡や伊勢遺跡が国史跡に指定されるなど、弥生時代に躍動した地域として名を馳せていますが、その後の時代の遺跡も遜色がありません。

縄文時代の守山



およそ1万6,500年前から1万年以上も続いた時代で、使われていた縄文土器をものさしに、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6時期に区分されています。晩期を除く時代の大半は、イノシシやシカ、^{ぎよかいりい}魚介類の

^{しゆりよう}狩猟や漁労、木の実などの採集によって暮らしていた時代です。

守山市で最も古い縄文時代の遺跡は約6,500年前の早期末の赤野井湾遺跡です。この遺跡は、現在の琵琶湖の水面から約3.7mの深さにあり、当時は琵琶湖の水位が低く陸地であったことがわかります。

赤野井湾遺跡の集落はその後、およそ5千3百年前の前期後半以降、中期、後期、晩期と断続的に営まれていたようです。おそらく、湖岸周辺は比較的安定して食料採集が可能であり、住みやすい場所であったのでしょう。

中期（約4,500年前）以降、遺跡の数が増えていきます。かつて野洲川主流であった境川の周辺で、^{きょうでん}経田遺跡や^{しもなが}下長遺跡、^{つかのこし}塚之越遺跡、古高遺跡などの遺跡が見つかっています。経田遺跡（今宿町）では、土坑から^{さきはた}咲畑式と呼ばれる東海地域の特徴をもつ縄文時代中期の土器と^{ていかくしきせきふ}定角式石斧や^{すりいし}磨石などの石器が出土しました。



縄文時代の遺跡分布図

中期以降、縄文人は野洲川デルタの豊かさを背景に、湖岸に至る平野部全域に次第に活動範囲を広げていきます。中期後半から後期にかけて、東日本の土器文化が西日本に伝わり、植物採集・加工技術や石罏炉を伴う住居、石棒や土偶、埋甕などを用いたまつりなど、野洲川流域に暮らす縄文人の生活に大きな影響を与えたことが考えられます。

吉山西遺跡では、縄文時代後期末（3,300年前）の竪穴住居や屋外炉や配石遺構、土坑に伴って、宮滝式と呼ばれる後期の縄文土器や、打製石鏃や石錘、磨石などの石器が見つっています。石鏃は未成品や剥片が多いことから自給していたことがうかがえます。先端の尖った石鏃や石錐、鋭い刃がつく石匙などの多くは、鋭利に割れるサヌカイトという石材が使われていました。このサヌカイトは滋賀県では採れない石材で、奈良県と大阪府にまたがる二上山から運ばれてきたと考えられています。縄文時代の近畿地方では、石器を作る材料としてサヌカイトが流通していたようです。

縄文時代晩期（3,300～2,800年前）になると、その活動範囲は沖積平野全域に広がっていきます。下長遺跡では、稲刈の痕がついた縄文土器が見つっていて、この頃には、稲作が始まっていたことがわかります。

播磨田城遺跡（播磨田町）では、晩期末の縄文土器とともに、意図的に壊



吉山西遺跡出土縄文土器と打製石鏃

された土偶の頭部が出土しました。眉や鼻は粘土を盛り上げて表現していますが、目と口は省略されています。額や頬には細かい線刻が施されていて、赤い顔料(ベンガラ)が塗られています。この線刻はイレズミを表現したものと考えられます。このような土偶は黥面土偶と呼ばれていて、東日本の縄文遺跡から多く出土しています。縄文時代晩期の



縄文時代の黥面土偶（播磨田城遺跡出土）

時期に、東日本地域との交流があったことを示す貴重な資料です。

弥生時代の守山

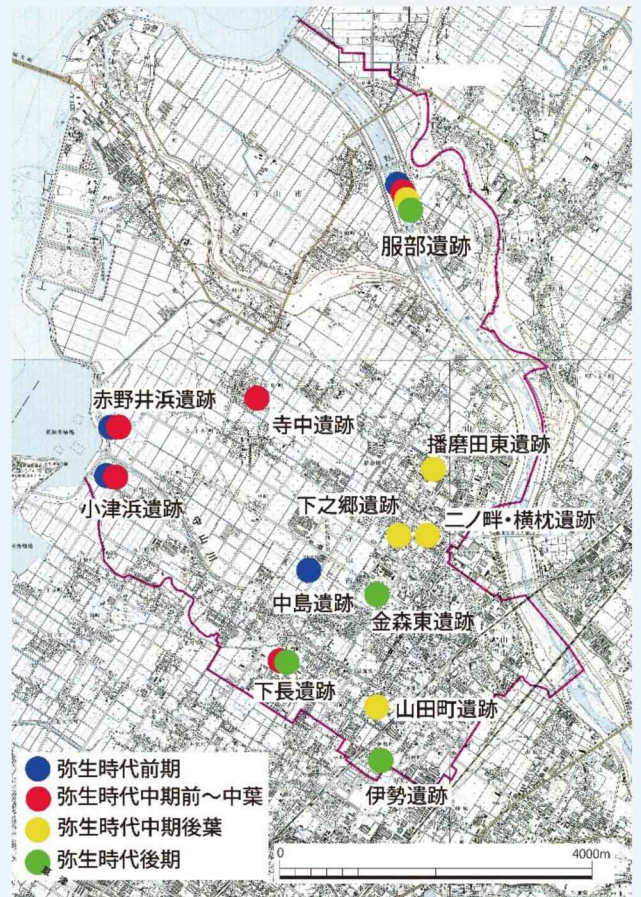
今から3千年から2千5百年ほど前に北部九州に伝わった稲作は、次第に西日本一帯にまで広がります。

守山市内では、服部遺跡（服部町）で弥生時代前期の水田跡が見つっています。また、小津浜遺跡（杉江、山賀町）や中島遺跡（三宅町）では、稲作とともに広がった弥生時代前期の土器・遠賀川式土器が見つっていて、野洲川下流域でも、早くから稲作が定着していたことが考えられます。

服部遺跡や小津浜遺跡は、いずれも琵琶湖の湖岸近くに位置しています。最初の頃の稲作が灌漑の必要があまりない湿地を水田として始まったことを想像することができます。

稲作の定着は、縄文時代の暮らしに比べて、安定した生活をもたらしました。人々は、次第に湖岸縁から離れ、内陸部に活動範囲を広げていきます。その過程で地域的なまとまりが促進され、中期末には、下之郷遺跡に大規模な拠点集落である環濠集落が出現します。そして、弥生時代後期の伊勢遺跡の時代には、それまでの「ムラ」から「クニ」と形容できる領域にまでまとまりを見せるようになります。

弥生時代の遺跡分布図



服部遺跡、前期の水田跡（弥生時代前期）

服部遺跡は、野洲川改修工事がきっかけとなり、昭和49年に発見されました。発掘調査の結果、弥生時代から奈良・平安時代までの先人の生活跡が残る複合遺跡であることがわかり、数々の成果を得ることができました。

数ある調査成果の中でも、弥生時代前期の水田跡が見つかったことが注目されます。畦によって、約10～200㎡の広さに区画された水田が約18,700㎡の範囲で見つかりました。現在の水田に比べ大変狭くて不揃いですが、ゆるやかに傾斜する低湿地を水田としたため、用水がまんべんなく行き渡るように地形に合わせて畦で区画した結果なのです。

さて、水田跡が発見された地層からは、弥生時代前期の土器・遠賀川式土器とともに縄文土器の伝統を受け継ぐ突帯文土器や縄文時代のまつりの道具・石棒などが出土しています。遠賀川式土器は、稲作を生業とした弥生人が使っていた土器で、一方の突帯文土器は狩猟採集の生活をしてきた縄文人の土器です。このことは、稲作に出会った琵琶湖の縄文人が弥生人と協業してコメづくりを行っていた、そのようなストーリーを想起することができます。

稲作文化はコメづくりとともに、表面を磨いて仕上げる大陸系磨製石器を日本にもたらしました。木材の伐採や加工に用いた石斧や稲穂を刈るための石包



水田跡の調査風景（服部遺跡）



突帯文土器と遠賀川式土器（服部遺跡出土）



弥生時代の打製・磨製石器

丁、磨製石剣や環状石斧^{かんじょうせきふ}など、縄文時代にはなかった石器が登場した一方で、サヌカイト製の打製石鏃や磨石、敲石^{たたきし}といった縄文時代からの石器も引き続き使われています。

このように、鉄が道具の材料として普及するまで、人々の生活に必要な道具として使われた石器は、縄文時代から弥生時代にかけての暮らしの変化を物語っています。

環濠集落・下之郷遺跡（弥生時代中期）

弥生時代中期になると、稲作農耕の集落も増加し、琵琶湖岸から内陸部に生産拠点を移します。そのような中、下之郷遺跡（下之郷町）に「環濠集落^{かんごう}」が出現します。集落の周囲に濠を巡らせた環濠集落は、吉野ヶ里遺跡^{よしのがり}（佐賀県）や池上曾根遺跡^{いけがみそね}（大阪府）、唐古・鍵遺跡^{からこかぎ}（奈良県）など、各地に形成されます。

なぜ、このような大規模な濠を集落のまわりに掘り巡らせたのかという疑問には、中国の書物に当時の日本列島が必ずしも平和な社会でなかったことが記されていることから、外敵の侵入を防ぐために濠をめぐるさせたのではないかと、あるいは水田の灌漑用水、集落の水はけや生活排水の役目を果たしたのではないかなど、いくつかの考えがあります。



弥生時代中期の土器（下之郷遺跡出土）



下之郷遺跡の環濠調査風景

下之郷遺跡の場合、東西約330m、南北260m、面積は東京ドームの1.5倍の広さにあたる約7haの範囲に幅5m、深さ2mの濠を幾重にも巡らせています。弥生時代中期には、このような大規模な土木工事を行うことができるくらいの広範囲のまとまりと人口を抱えていたことをうかがうことができます。

また、環濠を発掘すると、その当時使われていた品々や今から2200年前の植生を知ることができます。環濠はまさに、弥生時代のタイムカプセルと言えます。

伊勢遺跡の出現（弥生時代後期）

弥生時代中期末頃（1世紀前半）、近畿地方では、下之郷遺跡の環濠集落のような大規模集落が衰退していきます。そのような中、伊勢遺跡が伊勢・阿村町から栗東市にかけて出現します。伊勢遺跡では、12棟の大型建物が見つっています。そのうちの3棟は方形区画内に整然と配置され、方形区画東側に隣接して楼観と大型建物1棟が建てられています。さらに、この方形区画を取り囲むように円周状の位置に7棟の大型建物が見つっています。竪穴住居が一般的な住居であった時代に特異な景観を醸し出していたことでしょう。

このような大型建物群からは、伊勢遺跡が滋賀県南部地域に生まれた「^{くに}國」の政治・祭祀を執り行った中枢地で、「^{わこく}倭国」の形成に主導的な役割を担っていたのではないかと考えることができます。

弥生時代後期後半の紀元1世紀末頃には、もはやクニと呼ぶにふさわしいまでに地域的なまとまりが加速していったことが想像できますが、伊勢遺跡も弥生時代後期末（2世紀末）には衰え、独自の文化が栄えた近江南部も大和を中心とした新たな政治的まとまりに組み込まれていきます。



伊勢遺跡大型建物検出風景



伊勢遺跡大型建物想像図（小谷正澄氏作成）



伊勢遺跡五角形住居出土の弥生時代後期の土器

弥生土器の変化



弥生土器は稲作のはじまった頃から、支配者を葬った巨大な墓である古墳がつくられた古墳時代が始まるまで使われた土器です。

この土器は長年の研究によって、出土した地層や形の違いなどから、現在I～V様式の5種類に分類されています。そして、I様式の土器が使われていた時期を前期、II～IV様式を中期、V様式を後期と、土器によって弥生時代は3時期に区分されています。

これまで、弥生時代はおよそ紀元前3世紀中頃から紀元後3世紀中頃までの時期と考えられてきました。しかし、近年の放射性炭素年代測定や年輪年代測定などの結果から、弥生時代の始まりの時期が紀元前10世紀ほどにまでさかのぼる可能性が示唆されていますし、その終わりの時期、つまり古墳時代の始まりの時期についても議論が高まっています。

さて、服部遺跡の弥生土器をみると、弥生時代前期は、遠賀川式土器が主体を占めています。この土器は、西日本一帯で形や文様が共通していて、種類は貯蔵用の壺と煮炊き用の甕が中心を占めます。



弥生時代前期の土器



弥生時代中期の土器



弥生時代後期の土器

弥生時代中期には、各地で土器に地域色が強く現れるようになります。滋賀県(近江)では、口縁端部が立ち上

弥生土器の変化

時期区分	壺	甕	高杯	鉢	器台他
前期 I		 			
中期 II					
後期 III					
					水差し
後期 IV					
後期 V					

がり、粗い刷毛目で仕上げられた独自の甕が出現します。後に「受口状口縁甕」と呼ばれる土器の原型と考えられています。

そして、中期後半(IV様式)には、近江の地域色ともいべき、受口状口縁甕が増加します。

後期になると、受口状口縁甕以外の土器、壺や高杯、器台、鉢などは、全体にヘラ磨きという手法で仕上げられ、櫛描文などの装飾のない土器に変化していく傾向が見られます。

それまでの地域色は弱まり、土器の形も近畿地方一円で共有されるようになります。

近江形土器の消長

近江独自の受口状口縁甕のルーツを中期初頭に現れた波状口縁甕とする考えがあります。波状口縁甕とは、外上方に開く口縁の4か所が山形に突出し、口縁部内外面を刷毛目調整した甕です。そして、中期半ばには、口縁部を立ち上がらせた甕が作られるようになり、中期の終わりには口縁部が強く立ち上がり、口縁部や体部に櫛描文やヘラ描き



波状口縁甕

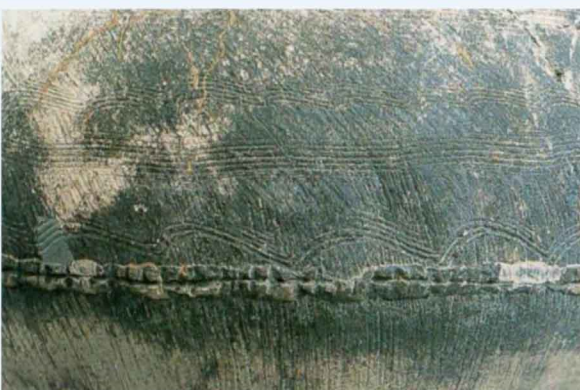
文で装飾する受口状口縁甕の典型が完成します。

その後、受口状口縁は壺や鉢にも取り入れられ在地性を強めていきます。このような受口状口縁甕に象徴される滋賀県独自の土器は「近江形土器」という呼び名で分類されることがあります。

近江形土器は、口縁が立ち上がり、受口状になることが一番の特徴ですが、その他にも粗いハケで全体を調整していることや、細かい文様を多く施すこと、土器をつくる粘土に細かい砂粒を多量に混ぜていることなどを挙げることができます。

近江形土器は甕に始まり、甕に終わるといってよいでしょう。その消長を詳しくみると、弥生時代中期の終わりには、口縁が鋭角的に屈曲し、立ち上がりが内側に傾斜した典型的な受口状口縁になります。また、均整のとれたプロポーションで、器面を飾る櫛描文様の華麗さもピークに達します。

後期になると、甕の受口状口縁は直立し、口縁の端がつまみ出されるようになります。また、下胴部に突帯を貼り付ける甕が見られますが、野洲川流域の近江形土器に限られた特徴と言えます。この時期には、近畿地方全体の傾向として、壺に長頸壺や細頸壺が加わり、主要な土器となること、全般的な変化として



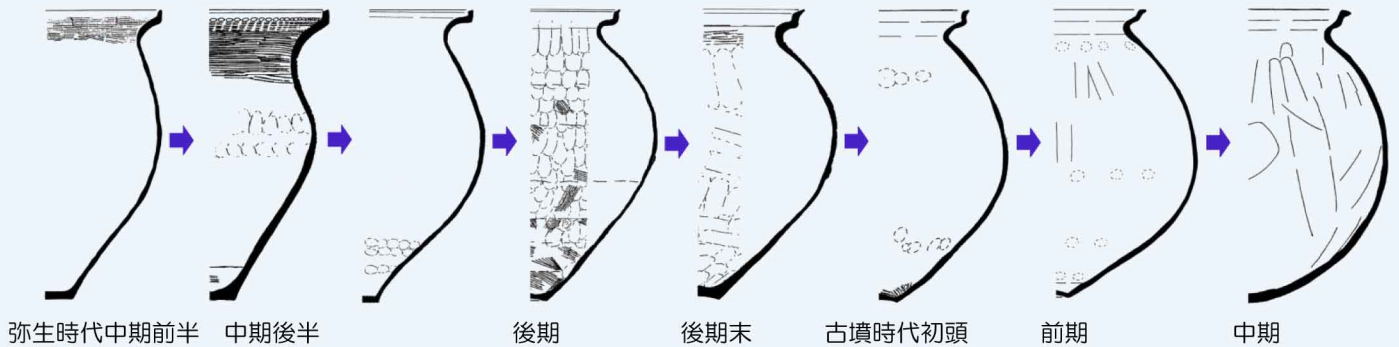
受口状口縁甕と下胴部に張り付けられた突帯文

中期のように文様で土器を飾ることが少なくなります。滋賀県の土器も受口状口縁壺や一部の広口壺などを除くと、そのような傾向がみられますが、その一方で甕や鉢、あるいは手焙形土器のような近江形土器の特徴が強く現れる土器には丁寧な装飾を施しています。また、近畿地方に共通する器台もしだいに近江独特のものにカスタマイズされるなど、依然強い地域色を維持していたことがわかります。

古墳時代に入ると、受口状口縁の退化が一段と進みます。器体は丸く膨らみ始め、古墳時代中期には、球形で丸底の体部に変化し、在来の特徴を持った甕も畿内通有の形になり、そしてついには、弥生時代中期に生まれて以来700年以上もの間継承されてきた近江形土器も終焉を迎えます。

煮炊きを使う甕にまで文様で著しく飾る近江の地域色は、他の地域にもまして弥生文化の中で異彩を放っています。このような近江独自の土器文化がなぜ生まれ、長い間続いたのか。そのことに対しての明快な答えはありませんが、野洲川流域の広大な沖積平野には、稲作農耕を生業とする弥生集落が多く営まれました。土地や琵琶湖、網目状に流れる野洲川の水、そして豊かな魚介類などの資源を共有していた人々の間には、強い共同体意識が形づくられていたと考えられます。こうした中で近江独自の文化が生み出され、醸成され、そして後の世代に脈々と継承されました。近江形土器もその一つと言えます。

受口状口縁甕の変化



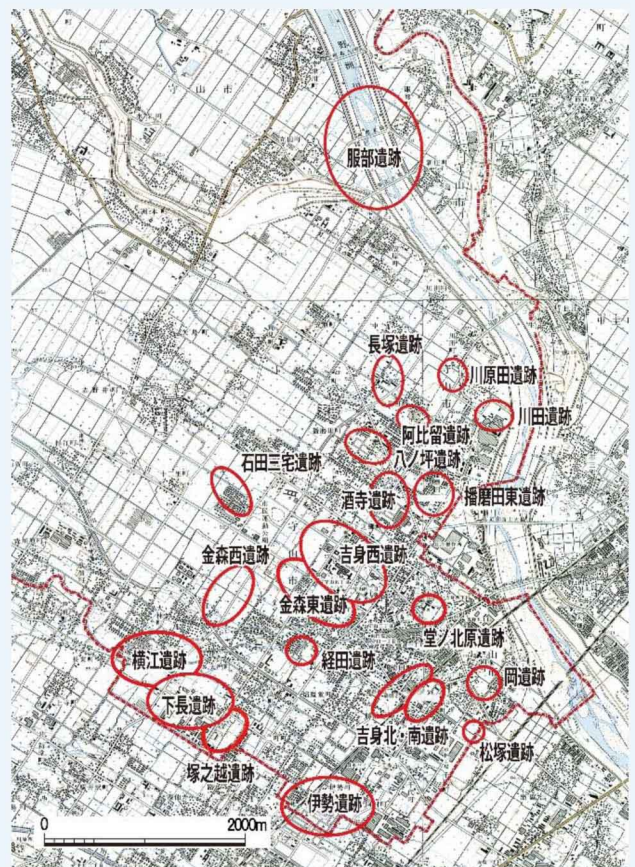
古墳時代の守山

日本列島では、3世紀半ばから7世紀末頃までの間、前方後円墳に代表される巨大な墓・古墳が数多く築造されました。古墳とは、支配者である豪族が葬られた墓で、築造された古墳の総数は10万基とも20万基とも言われています。この象徴的なモニュメントがつけられた時代を古墳時代と呼んでいます。

弥生時代から始まったムラからクニへのまとまりは、この時代には、前方後円墳のような巨大な古墳をも築くことのできるほどに支配者の権力が強大化していき、ヤマト王権とよばれる連合政権を誕生させ、日本の国の原型が出来上がります。

発掘調査では、人々が暮らしていたムラ跡、墳丘が削られ埋もれていた古墳など、多様な遺構が見つかります。また、古墳時代には、大陸や半島との交流が一層活発になります。特に5世紀から6世紀にかけて、朝鮮半島から多くの渡来人が日本に移り住みます。渡来人の携えてきた先進の文化や技術は、金属や土器、玉、機織りなど、幅広い分野の手工業生産に変革をもたらし、人々の生活様式にも大きな変化が起こりました。

渡来人によって、ヤマト王権の政治体制は強化され、軍事・生産力を高めることができました。



古墳時代の主な集落遺跡分布図

守山の外来系土器

古墳時代になると、湖南地域の「クニ」の中心地であった伊勢遺跡は衰退し、その代わりに現れた下長遺跡が拠点集落として繁栄していきます。大陸や半島との交易は瀬戸内海ルートに加え、日本海ルートが活発になります。古墳時代の琵琶湖は、ヤマト王権の中枢地であった奈良・大阪と、日本海沿岸地域や東海地方を水運によって結び、遠隔地の人や文物が行き交う重要な流通経路だったのです。

水運の物流基地として栄えた下長遺跡では、広範な地域の特徴が認められる外来系土器が出土していて、交流地域やその経路を知る重要な手掛かりになります。奈良・大阪などの近畿中心地域でつくられた甕や山陰地方、日本海沿岸地域、瀬戸内海沿岸地域、東海地方の土器が見つかっていて、下長遺跡の交流が広範な範囲にまで及んでいたと考えられます。

古墳時代中頃には、各地の文化を反映した土器は次第に衰退していきます。受口状口縁甕など、湖南地域の独自文化を象徴する土器もこの時期になると、近畿地方通有の土器に置き換わっていきます。



古墳時代前期の外来系土器

土師器と須恵器

JR守山駅周辺の吉身北・南遺跡や県立守山高校周辺の金森東遺跡などにも古墳時代後期のムラが形成されるようになります。朝鮮半島からの渡来人もたらした技術や文化によって、人々が暮らす竪穴住居には調理施設としてカマドが導入され、調理具の甑・鍋も使われるようになり、蒸す調理法が新たに加わるようになります。

そして、「野焼き」によってつくられた土師器に加え、新来の土器・須恵器が使われるようになります。須恵器は轆轤（回転台）でつくられ、窯によって高温で焼き上げられます。そのため、土師器と比べ、表面が緻密で、堅く焼きしまった青灰色をした土器で、渡来人によってもたらされました。



金森東遺跡の古墳時代の竪穴住居

須恵器は生産技術の習得によって、6世紀には生産が始まり、広く普及するようになります。また、竪穴住居自体も屋内の変化に伴い、従来の地上近くまで屋根を葺く半地下式の構造から地面を余り掘り下げずに壁を立ち上げた構造に、そして掘立柱建物へと変化していきます。

手工業の発達 玉づくり

5～6世紀のムラを発掘調査すると、必ずといってよいほど竪穴住居から滑石を材料にした玉や未製品、原石が、時には、それに伴い玉づくりの工具も見つかります。滑石の他にも水晶やヒスイ、メノウなどの石材でも玉づくりを行なっています。

玉づくりの原石は県内では産出されないものが多く、おそらく和歌山県紀ノ川流域や日本海地域から、琵琶湖の水運を介して運び込まれたものと想像されます。古墳時代の県内の玉づくりは、湖北の長浜市高月町で生産遺跡が見ついている他は、草津市や栗東市、守山市の野洲川流域に集中していて、いわば古墳時代の地場産業と言えます。



古墳時代後期の土師器と須恵器



玉類（右）と玉づくりの工具（左）

木製農具

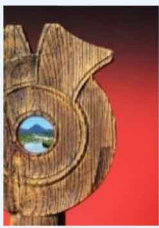
稲作が始まった弥生時代以降、水田を耕す農具として、鋤や鍬が使われていました。鋤は、水田の土を掘り返すときの農具として、水田に畦や水を引くための水路をつくるなどの土木工事に使われました。

鍬は土を掘り起こす農具で、直角に近い角度で柄がつけられています。幅が狭くて重い打ち鍬は、新しく水田を切り開くときに、水田を耕すときは広鍬、泥んこの水田を耕して均すときには、泥除けのついた鍬が使われるなど、形や重さが違う、様々な鍬が使われていました。

鉄製の道具が普及するまでは、鋤や鍬は堅くて丈夫なカシの木で、そのほかの農具も使われ方に応じて、木材を選んでつくられた木製農具が使われていました。



古墳時代前期の木器・木製品



まつり・威儀具

古墳時代の支配者は、集団を統率するために自らの権威を誇示する様々なアイテムを用いました。ここでは、権威を示す支配者の所持品を威儀具と呼んでいます。祭儀具である鏡や勾玉などの玉類、石釧、刀剣装具類は普遍的な威儀具として挙げることができますが、時として、儀杖や衣笠（蓋）の立ち飾り、団扇状木製品などのヤマト王権の成立過程で使われていた稀有な威儀具が出土します。

儀杖は、古墳時代に琵琶湖の水運による物流の基地と性格づけられる下長遺跡より出土しました。1mほどの柄の上端に丸い穴のあいた飾りを削り出しています。よく観察すると、飾りはドーナツ状の帯と、両端の幅が広がった帯を交差させて組み合わせしており、弧帯文と呼ばれる文様をモチーフにしていることがわかります。弧帯文は弥生時代後期に誕生した直弧文をルーツにもつ権威を象徴する文様と考えられています。権力者のちょうど肩あたりで上端飾りが映える、なんとも効果的なアイテムであったことでしょう。

衣笠の立ち飾りは八ノ坪遺跡から出土したもので、4世紀末ごろの時期と考えられます。従者が権力者の頭上に差し掛ける柄の長い笠(衣笠)の頂上を4枚一組で飾っていたのが立ち飾りです。この立ち飾りは組帯文を透かし彫りした後、黒漆を塗って仕上げています。

組帯文もまた、儀杖に施された弧帯文と同様に直弧文の系譜を引くもので、衣笠を差し掛けられた人物の権威を視覚に訴えています。

衣笠は、古墳に並べ立てられた形象埴輪にも蓋形埴輪として象られていて、奈良県の佐紀陵山古墳出土の埴輪に表現されている立ち飾りに酷似しています。

この古墳は墳丘が2百メートルを越える前方後円墳で、垂仁天皇の皇后であった日葉酢媛命がその被葬者にあてられています。また、奈良県高松塚古墳の壁面に見られる貴人自らが顔にかざした翳や従者が貴人に差し掛けた蓋などは、限られた権力者が使用した特殊な威儀具といえます。

古墳時代の近江は、琵琶湖が日本の東西、南北を結節し、ヒトやモノが行き交う要衝でした。儀杖や立ち飾りは、ヤマト王権と深く繋がり、権勢を誇っていた人物がいたことを示唆しているのではないのでしょうか。



様々な威儀具（団扇状木製品はレプリカ）

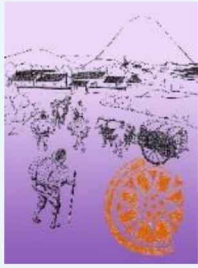


守山市内で見つかった銅鏡



衣笠の使用（想像図）

古代の守山



古代とは、奈良県の飛鳥に都が置かれた飛鳥時代（592～710）、それに続く奈良時代（710～794）、平安時代（794～1185）をさしています。

この時代は、中国の統治制度に倣った律令制を導入し、天皇中心の中央集権的な国家づくりが始まりました。また、国家の施策として、仏教の興隆を図るために数多くの寺院が建立され、飛鳥・白鳳文化がおこりました。

服部遺跡や赤野井遺跡、二ノ畦遺跡では、軒を揃えた掘立柱建物群とともに、木簡や文字が書かれている墨書土器、ヘラ描土器、硯など、一般の集落ではあまり出土することのない文字関連の資料が多数見つかっています。文字を読み書きできる人が限られていることから、役所に関する施設があったと考えられます。

服部遺跡では、ほかにも「乙貞」と刻まれた銅印や和同開珎や萬年通寶、神功開寶などの銅銭、役人の階級を表す「銅製帯金具」が、赤野井遺跡では、「赤見」や「大吉」、「郡家」、「左(佐)家」の文字が書かれた墨書土器、ヘラ描土器が出土しています。

二ノ畦遺跡では、「川原」の文字を記した墨書土器や須恵器の蓋を転用した硯が見つかっています。川原田遺跡でも、旧河道から墨書土器や「稻一束必令持今口」と墨書きされていて、「稻一束」を催促する内容が書かれた木簡の文字資料、須恵器の蓋を転用した硯などが出土しています。

律令制では、地方の行政区分は現在の都道府県にあたる国の下に郡をおき、郡は里（郷）に分かれていました。上記の遺跡は市内に想定されている服部郷、明見郷、馬道郷、敷智郷の郷毎



服部遺跡出土銅印・銅銭・帯金具

に位置していて、郷関連の施設と考えることもできます。

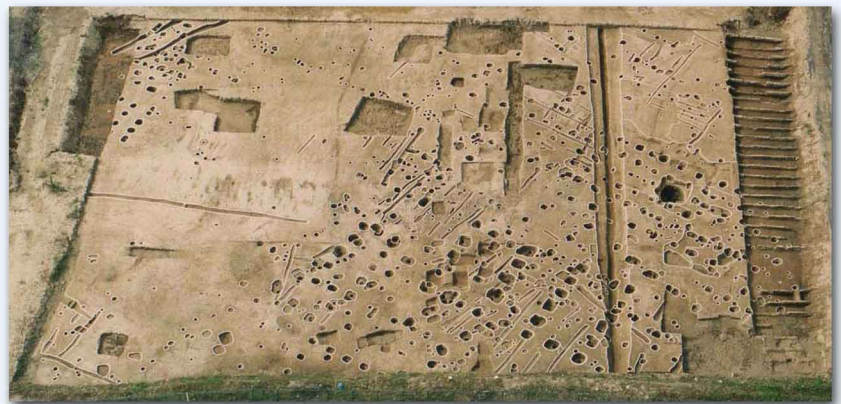
また、『日本書紀』には、「(守山市が属していた)野洲郡に益須寺という寺があり、その近くで湧く水が多量の病人の治癒に役立ったので、持統天皇から褒美を賜った」という内容が記されています。吉身六丁目から七丁目では、飛鳥～奈良時代の瓦がまとまって出土することから、記載のある古代寺院・益須寺建立地に推定され、益須寺遺跡として周知されています。



益須寺遺跡から出土した古代の瓦

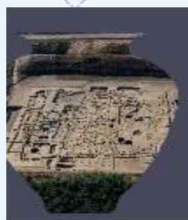


国や郡、郷名が記された土器



二ノ畦遺跡発掘調査で見つかった掘立柱建物群

中世の守山



中世とは、律令制の弱体化に伴って、武家が政権を握った鎌倉時代（1185～1333）から室町時代（1336～1573）をさしています。

中世になると、農業生産や商業・手工業の発達と貨幣経済の広がりによって、物の流通が一層活発化します。

横江遺跡や欲賀城遺跡、播磨田城遺跡などの中世集落の調査では、それまで散在していた住居が有力農民を中心に集村化し、より地縁的な繋がりが強い村落が形成されました。

また、土器・陶器といった生活の品々を見ると、食器は地元で生産された黒色土器碗と大小の土師器皿が基本となり、捏ね鉢などは信楽焼が大半を占めます。そのほかに、常滑焼や備前焼などの調理具と遠方からもたらされた輸入陶磁器が加わるという共通した出土傾向を示しています。

横江遺跡では、平安時代から鎌倉時代にかけての集落が形成されますが、鎌倉時代後半になると、各屋敷地を溝で区画した計画的な屋敷地割が行われます。各屋敷地は規模に違いが見られ、最も大きな屋敷地からは、他の屋敷では見られない中国製の陶磁器が発見されていて、集落の有力者の屋敷と考えられます。

欲賀町集落西辺の欲賀城遺跡でも鎌倉時代から室町時代にかけての集落の様子がわかりました。鎌倉時代は、屋敷地割を溝によって区画し、室町時代に入ると、その地割を囲むように「堀」が巡らされるようになります。このような堅固な集落の在り方は、かつて欲賀にあったと伝承されている「城」の存在を傍証するものかもしれません。



守山の古道と中世の集落

この遺跡や播磨田城遺跡でも、黒色土器、土師器、信楽焼が出土品の大半を占め、日常生活に不可欠な常滑焼や備前焼などの陶器が流通し、横江遺跡にみられるような輸入陶磁器も出土しています。

守山は陸上・湖上交の要衝を占めています。横江遺跡や欲賀城遺跡は、中山道守山宿から分岐して、草津市の志那港に通じる志那街道の道筋、あるいは境川などの水利に恵まれた場所に位置していたことから、当時の流通ルートを通じて、遠隔地の品々ももたらされていたことがわかります。



左上：横江遺跡遺構概略図 右上：横江遺跡出土土器 左下：遠隔地の土器、陶器（欲賀城、欲賀、欲賀南遺跡） 右下：輸入陶磁器（欲賀城、欲賀、欲賀南遺跡）



守山市立埋蔵文化財センター

〒524-0212 守山市服部町 2250 番地

TEL&Fax 077 (585) 4397

mail : maizobunkazai@city.moriyama.lg.jp

開館時間：午前9時から午後4時まで

休館日：火曜日・祝日の翌日・年末年始

入館料：無料

HP : <http://moriyama-bunkazai.org/center/>

